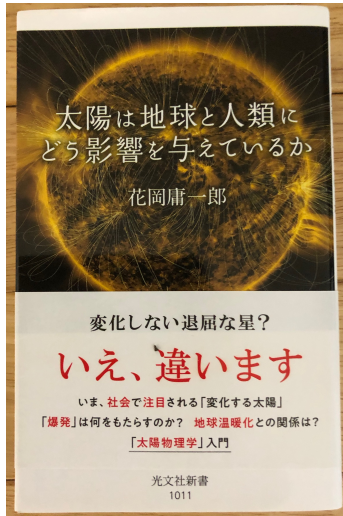


書評

『太陽は地球と人類にどう影響を与えているか』

花岡庸一郎 著

矢治健太郎（核融合科学研究所）



花岡庸一郎 著

光文社新書／253 ページ

本体 980 円＋税／2019 年 6 月発行

久々に出版された太陽に関する一般向けの一冊。しかも、新書タイプのもは 2013 年に出た「太陽大異変 スーパーフレアが地球を襲う日」（柴田一成）、「太陽で何がおきているか」（常田佐久）以来である。しかも、新書の割に意外と分厚い（253 ページ）。また、カラーの写真や図がかなり豊富。新書のカラーページというと冒頭に口絵としてまとめられていることが多いが、ここでは該当ページごとに印刷されている。

さて、太陽活動周期が約 11 年であることはよく知られている。太陽活動周期には通し番号が振られていて、2009 年から 2020 年にかけてが第 24 活動周期と呼ばれている。ちなみに太陽活動が最大になったのは 2014 年。この活動周期では、2014 年 10 月に巨大黒点が出現したり、2017 年 9 月に巨大太陽フレア

アが頻発したりしたので覚えている方もいるだろう。特に巨大太陽フレアの方は、評者（矢治）も国立天文台在職時に複数のメディアから問い合わせがあり、対応に大変だったので、印象に残っている。本書の冒頭では、これらの現象を導入として取り上げている。

「太陽は地球と人類にどう影響を与えているか」というタイトルであるが、二つの観点で、話が展開する。一つは、太陽フレアのような突発的な現象がどのように地球に影響を及ぼしてきたか。もう一つは、太陽活動の長期的な変動が地球やわれわれの生活にどんな影響を及ぼすことになるか。天文学史的な話題、特に、あまり一般に知られていないような太陽観測史的なエピソードも豊富である。

例えば、太陽黒点の観測といえば、まずガリレオの名前があがるが、ここでは当時の黒点スケッチを紹介しながら、ドイツのシャイナーの業績にスポットを当てている。1859 年の太陽フレアでは、当時のオーロラや磁気嵐との関係について紹介しており、さらに、1989 年にケベック州で大停電を引き起こした太陽フレアも詳細に触れている。戦前に日本で太陽電波らしいものを捕らえてた（かも）なんて話題もある。17 世紀後半に半世紀近くも黒点がほとんど出現しなかったというマウンダー極小期についても。近年の地球気候との関係も含めて、詳しく書かれているので興味を示す人もきっと多いにちがいない。

2015 年に過去の黒点数が改訂されたことは、一般にはあまりよく知られていないトピックかもしれない。その辺の事情も詳細に説明されているので、個人的にオススメ。

著者は、国立天文台で長きに渡り、太陽の

地上観測に関わってきた太陽研究者である。日食観測などでも、アマチュア天文家との連携や交流も活発である。評者が、和歌山県の公開天文台で勤務していたおり、第 23 太陽活動周期の極大期を控えた 1999 年に太陽望遠鏡ワークショップの開催に手助けしていただき、参加した天文教育普及関係者に太陽観測をエンカレッジしていただいた。そんな著者の背景もあってか、本書は一般向けに興味をひきやすい内容となっている。過去の太陽活動に関する情報量がとにかく多いこともあり、学校の理科授業や、天文普及施設の太陽関係の展示に大変参考になる。

さて、無黒点な日が多い太陽であるが、これから第 25 活動周期を迎えるにあたって、黒点もぼちぼち増える頃。その前にこの本を

一読してみるにはいかがだろうか？



矢治 健太郎

* * * * *